

約40㎡の3階資料室の実際の活用をはかることになり、まず標本棚、標本箱等の充実、ついで一部資料の整備がここで始められた。骨標本ならびに化石カストを中心とした永久標本がここに整理保管され、研究への利用化がはかられることになるが、完全な充実までにはなお暫くの期間が必要である。

一方、例年の方式に従って、実験殺等で生ずるものほか、一部所外よりの入手も含めて、霊長類死体の収集が行われ、研究用の液浸標本ないしは骨標本として管理保管される作業が進められた。資料の蓄積が行われてきた結果、所内外の研究者にかなり利用されるようになってきている。

重要な課題として、資料の充分なリスト化が望まれているが、液浸標本の定期的ホルマリン入れかえや、骨標本作製等の実作業をまず優先させざるをえない状態にあり、また、委員の海外出張が重なったこともあって、実現は次年度以降に持ちこされた。

なお、資料関係に要した経費は、資料収集用旅費も含めて約53万円であり、資金としては所内全体より資料委員会あてに振りあてられた予算を中心に、一部、系統・形態基礎部門よりの拠出があった。(岩本)

4. 研究活動

形態基礎研究部門

近藤四郎・岩本光雄
渡辺 毅・毛利俊雄

研究概要

1) バイペダリズムの起源に関する研究

近藤四郎

科学研究費(総合研究A)「バイペダリズムの進化における小型類人猿モデルの位置の検討に関する研究」のまとめの年度にあたっていないので、私の分担事項であるアジルテナガザル、シロテナガザルなどの比較解剖を行った。サルの下肢筋の起始、終止の決定は、むつかしいがさらに筋の作用を推定することは、なお、むつかしい。ヒトでは股関節の伸筋である大腿筋がヒト化の段階において、従来いわれていたように外転作用をもっていたものかどうか、乏しい化石標本を見くらべ

ながら、検討を進めている。

2) 旧世界ザル、特にマカクに関する形態学的研究

岩本光雄

主としてニホンザルに関して研究を進め、永久歯期ニホンザルの発育に関する資料(歯式と生体計測値)、ニホンザルの皮膚隆線系に関する資料、ならびに山口県秋吉台および北九州市平尾台出土のニホンザル古骨に関する記録の整理、分析を行った(継続)。

3) エチオピア国における現生ならびに化石霊長類に関する研究

岩本光雄

文部省海外学術調査費によりエチオピアにおもむき、ゲラダヒヒに関する形態学調査(生体計測、皮膚隆線系資料の採取、歯式ならびに観察的特徴の記録)と、オモ川下流域におけるヒヒ化石に関する調査を行った。

4) 霊長類の成長に関する研究

渡辺 毅

継続研究として、日本各地に生息するニホンザルの生体計測にもとづくデータを蒐集中であるが、今回は伊豆波勝崎で野外調査をおこない、また霊長類研究所で飼育中の鳥取県若桜町出身のニホンザル3頭については出生直後より個体追跡法によってデータを蓄積した。

5) 新世界ザルの系統学的・形態学的研究

渡辺 毅

前年度におこなった海外調査の成果をとりまとめた。

6) 頭骨の非計測的変異によるヒトの集団間比較及び、その現生霊長類への応用

毛利俊雄

日本を中心としたヒトの集団(現代近畿人、樺太アイヌ人、南西諸島人、朝鮮人、縄文時代人等)の頭骨について約30項目の非計測的変異についてデータを集めた。また同様の手法を現生霊長類に適用するために関連する文献を収集した。

総説

- 1) 渡辺 毅(1978): キヌザル科の分類の現状。モンキー, 22-2.3, 46-51。
- 2) 伊沢 弘生・渡辺 毅・稲垣 晴久・松本久信(1978): キヌザル科のサルたちの新

和名と日本モンキーセンターの資料。モンキー, 22-2・3, 52-55。

論文

- 1) Okada, M., T. Kimura, H. Ishida and S. Kondo (1978) : Biomechanical aspects of primate quadrupedalism. *Biomechanics* 6A, ed., E. Asmussen & K. Jorgensen, pp. 119-124. Univ. Park Press, Baltimore.
- 2) Okada, M. and S. Kondo (in press) : Physical strain of bipedal versus quadrupedal gait in nonhuman primates. *Proc. 10th Intl. Congr. Anthropol. Ethnol. Sci.*
- 3) Brehme, H. and M. Iwamoto (1978) : Über die Hautleistenmuster auf den Handflächen und Fusssohlen von 226 Orang Utans (*Pongo pygmaeus* L.). *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*, 108, 8-26.
- 4) Matubayashi, K., M. Hirai, T. Watanabe, Y. Ohkura, and K. Nozawa (1978) : A case of patas-vervet hybrid in captivity. *Primates*, 19, 785-793.
- 5) 渡辺毅・相見満・松本真 (1979) ニホンザル若令期の成長と性差。『ニホンザル地域集団における性の役割についての社会生物学的研究』, pp. 6-20。
- 6) Setoguchi, T., N. Shigehara, and T. Watanabe (1970) : Description of a new caviomorph rodent from Miocene of Colombia, South America. "Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys" pp. 47-50.
- 7) Watanabe, T. (1979) : Craniometrical studies on *Alouatta seniculus* —— from

the view point of sex differences and age changes ——. "Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys," pp. 51-57.

学会発表

- 1) 系統発生における喉頭軟骨の分化とその意義
— 食虫目・翼手目・齧歯目と霊長類との対比 —
野首和人・葉山杉夫
岩本光雄
第23回プリマーテス研究会
- 2) ウーリーモンキーにおける性差
渡辺 毅
第32回日本人類学会民族学会連合大会 (1978)
- 3) 一般的形態からみたニホンザルの成長・発達
— 性成熟期を中心に —
渡辺 毅
プリマーテス研究会第1回談話会

神経生理研究部門

久保田競・松波謙一
酒井正樹・三上章允

研究概要

- 1) 行動発現における前頭葉のニューロン活動の役割の研究
久保田競
前頭葉のニューロン活動のうち、行動発現に先行して活動するニューロン活動が行動や運動のどの側面に因果関係を持つか、また空間位置の記憶とどう関係するかを遅延反応、弁別反応、追跡運動を学習させてニューロン活動を記録し、解析している。またHRP法によって、前頭葉からの運動系への遠心性経路を決めようとする。また脳内自己刺激法を併用して、動機づけの機構が前頭葉ニューロンにどう関与するかの研究を開始した。
- 2) 視覚性追跡運動中の誤差補正運動と錐体路細胞及びIa線維の活動様式
松波謙一・久保田競
サルに視覚性追跡運動を行なわせ、運動の途中